



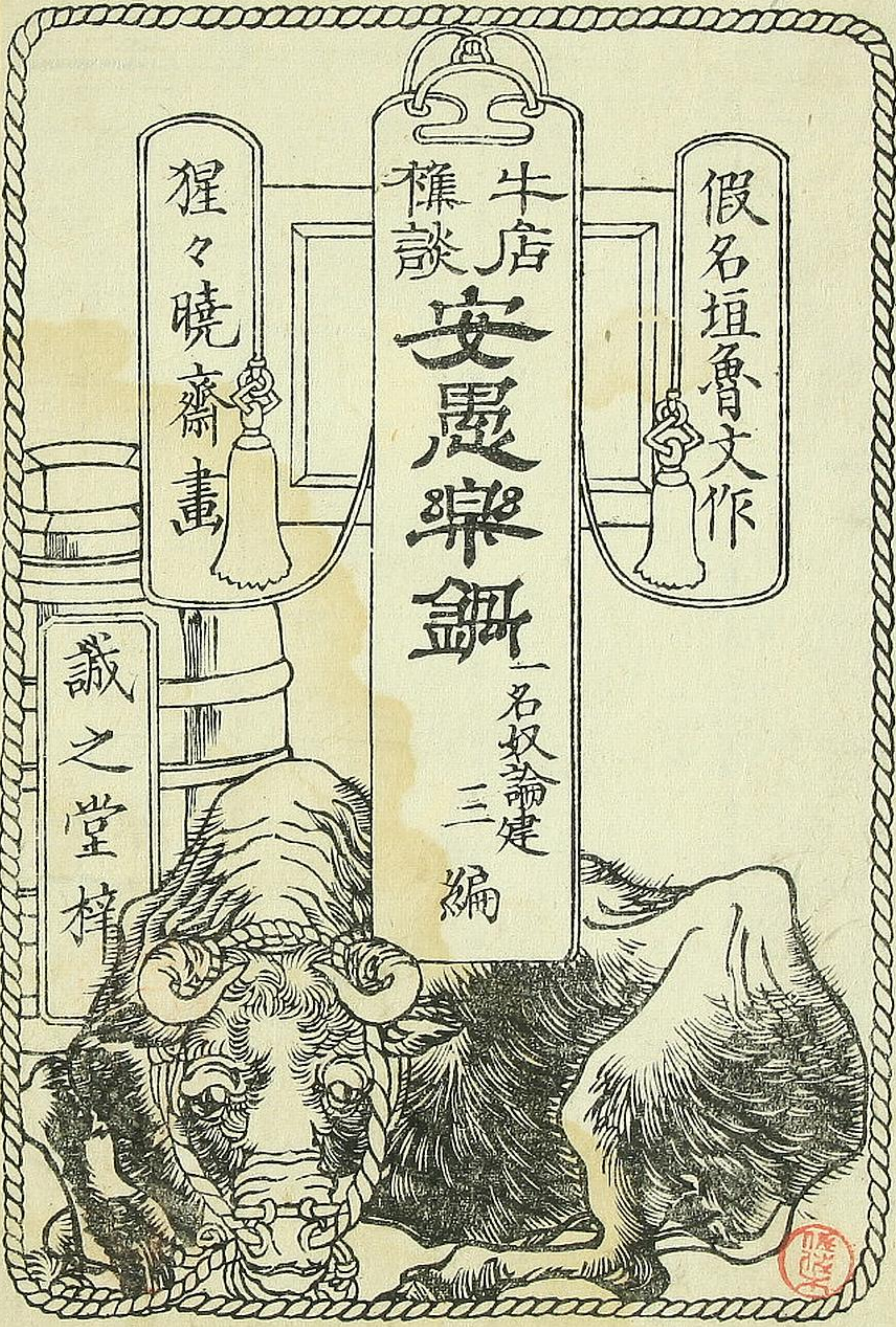
假名垣魯文作

牛店 權談 安愚樂 餅

一名奴論建  
三編

猩々曉齋畫

誠之堂梓



牛店雜談安愚樂鍋第三輯序

とねまらちきりてん

種痘ハ天下ノ仁術肉食ハ萬民ノ滋養ナリ

故ユエニ牧牛ノ國家ニ益アル豈他獸ト等シ

カラシヤ方今開化稍ク進ミ市井ノ細民ト魚

モ牛痘牛肉ノ世ニ切アルヲ知ルモノカラ隨ツテ

医治ヲ全フシ億兒百歳ノ壽ヲ存シ從ガツテ

食料ヲ調シ衆庶健康ノ體ヲ保ツニ至ル令  
 日ノ僥倖何事カ是ニ如シ此頃魯子ガ著  
 述ノ小説安愚樂鍋三輯ノ稿ヲ披閱シ  
 テ談笑諷諫ノ筆意ニ感アリ小道トイ  
 エドモ見ルベキモノアリ嗚呼談何ゾ容易  
 ナラン依リテ簡端ニ一言ヲ贅シモツテ感

讀ヲ謝スルト爾云

干時明治第五年壬申ノ孟春吉且  
 東京淺草金龍山下ノ旅店駁羽屋  
 ノ小坊ニ於テ陸中國水澤ノ數医  
 卧半散人 小野涼亭記之

本地 祭三月十九日

英國医聖延涅耳  
保赤牛痘祖神之像

洗子 真室謹字

# 普照十方

# 最濟万兒

御詠歌

原語和解

我々の先々世の...  
痘の勇魔の...  
福...  
...  
...



卧牛山人施印

和漢西洋  
奪體換骨

## 流行情態文作道場

東京淺草諏訪町  
假名垣魯文製

治亂真廢狂言綺語

古今の事跡と種々の類  
の趣向と設くると類

内外小説時代世話

支那印度西洋我國の面日記  
と加しと冊子小著と類

江湖新報滑稽奇談

世の中の筆頭小穿の類  
流行と筆頭小穿の類

序校文章略傳填詞

物の本の文章の綴る類  
あどを文章小綴る類

○此他詩歌連俳諸流の

新淨璃理長唄端唄と

口上茶番神祇祭禮の地口行燈

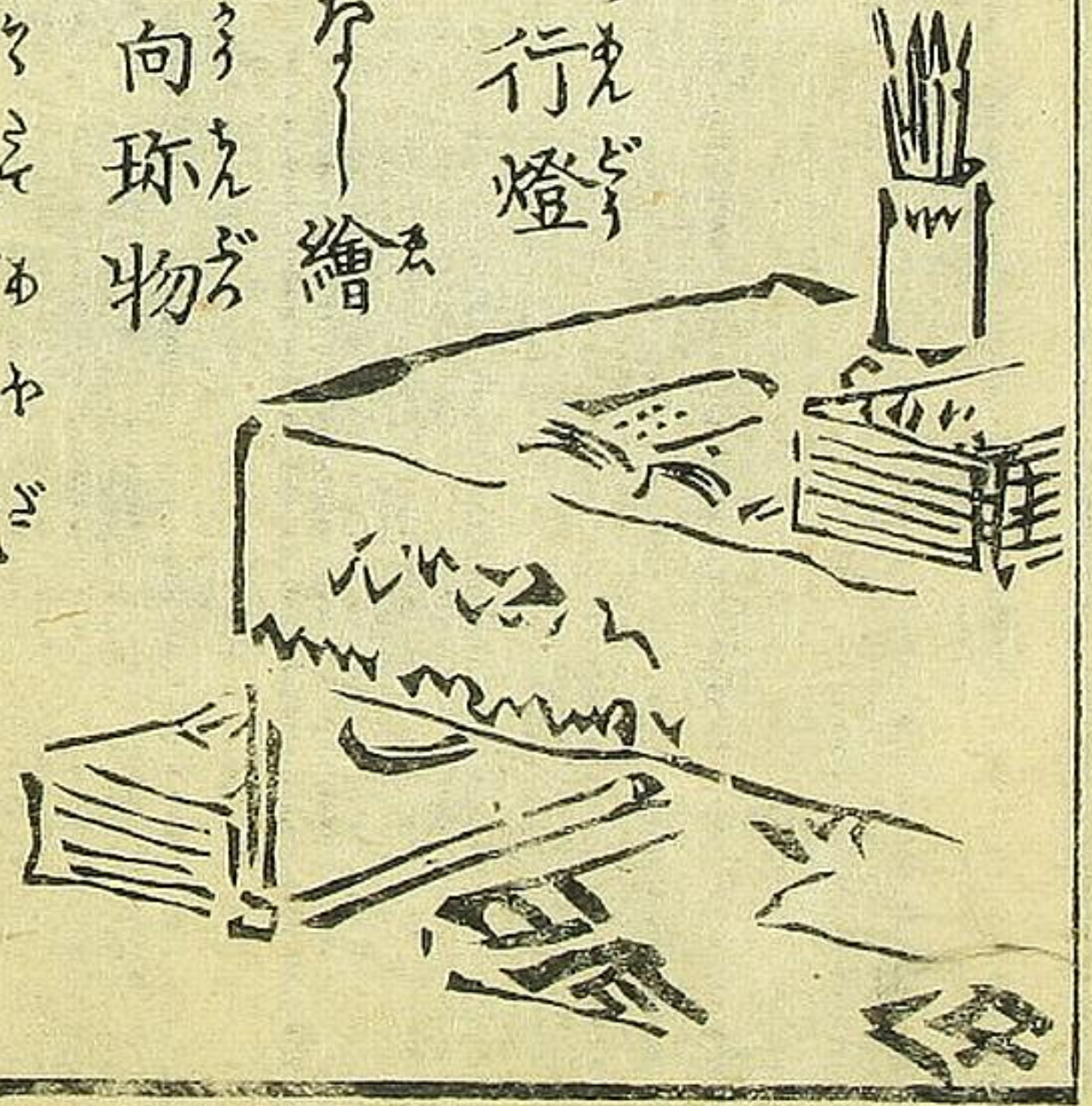
季句語呂合三題話一口どか〜繪

と〜真画合依狂言の趣向玩物

觀物の演義らんと靈宝の言立阿保陀

羅經らむらむと厄拂ひの文句都て筆頭不出る者

森羅万象何事やよ〜御好次第宗文仕り良



告條

梨園の立見一日は充ぶとども俳優の藝頭と

慥不評一花街の素見一夜は盡さむとども娼妓

の品定め殊と委一銀箔の月明鑑きふあ〜

物言花手折一事ある或は戯房は不入一三階

の事情を穿ち又ハ三蒲團小坐さび〜て青樓の

艶情を究めんとする者い何ぞや往昔所謂半

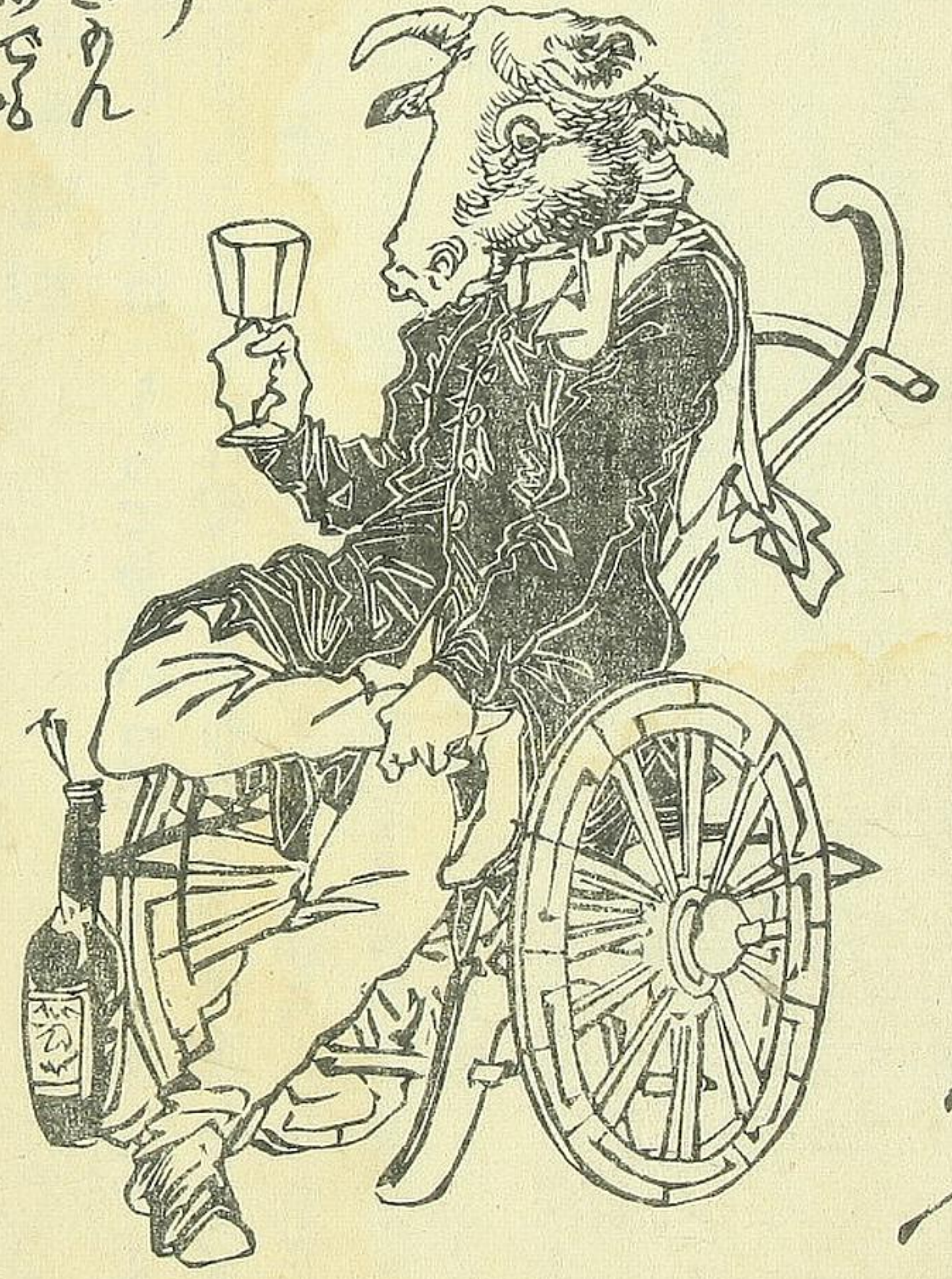
可通當世渾号て生聴連此境界を遁まらざる  
 徒化して戯作者と変まらざるより我輩某が  
 顰ふ倣ひ翠簾屋臺金紙戸の圖割の詰開き  
 の演説紋切形を填詞と鳳凰靈臺大中小の  
 廓記アリリスラツ区の茶表紙を生捕る如斯  
 生熟まいた風似と山連の我輩が芝居評判  
 花街の情態著述は僥倖發客あり讀中ぬ同

志書かぬ同志大に進歩ハ贅者の捧頭文  
 盲千人筆硯萬福活業名利名聞と利欲を羨  
 文人商個例の墮落の戲場水戸と小娼格子  
 の安店を改正再開たる堅固舗毎日常宿休  
 業あり日限の注文か急ぎ合点心得短文長  
 編ありと御間合せりしこの章の假  
 名釘も是天性の役割番附下手は長文



牛人牛社

牛人牛社  
 つゆあつ  
 のとせ  
 あんげんが  
 ひらけぬ  
 まつら  
 あらがわ  
 目くら  
 つのあんぞ  
 ぐんぐん  
 ぐんぐん  
 ぐんぐん  
 ぐんぐん



牛人牛社  
 あんげんが  
 ひらけぬ  
 まつら  
 あらがわ  
 目くら  
 つのあんぞ  
 ぐんぐん  
 ぐんぐん  
 ぐんぐん  
 ぐんぐん



牛人牛社  
 あんげんが  
 ひらけぬ  
 まつら  
 あらがわ  
 目くら  
 つのあんぞ  
 ぐんぐん  
 ぐんぐん  
 ぐんぐん  
 ぐんぐん





亭子に並ぶる意をいつけて板敷らうのを食ひせうか  
らとめての牛店まにぞりめつふとらむヨはむひふ  
まて十二字生れおあつてから後が滅びたまうねる組  
から或牛店へもいつたところから店のかうをいふとりのか  
ら合今見のもとめやで穀の蒲焼骨板とせう柳川  
流の出菜合店と牛肉お押きて牛の牛連と出あ  
やうに上りてくそイヤ事知れつてや女あんどがからつ  
はし牛馬でふ分意とらむとりのかと昆布のせう

奥せんノ生をちゆうのんせうやア鶏印を括ッて朱り  
おせけ小肉とりやア日向乾とらむををるさゆう小  
カラく志を筋だらけせうら唾でせもちねをねへ  
右奥くあつて老牛を食ひせらむたので整り小を  
付録つてかんぢゆうとせう飛出たが実小牛肉を  
りの目揚いさうびらサあう一福地先生あんどい古  
奥いのが可とらんツあるが主人は志やア屠て二日  
目あつてが宮上女子宮上とらやアとらんどあめりう十八

家から運きた羅紗の綿ありの上物などが十行堂  
 であつて賣る人のんだが小買のねへる子何サ  
 店で小賣のせうやア百田ららいらりかゝる品物  
 たりとどおいらア一寸神をすで船行く来て人  
 からまで代物を措幣の引替ねへるやア都合が  
 悪くからサエ、高さん南系米が築地のある高  
 橋へ千俵をかり買つてどうさかめ買のねへる何  
 中ぶ下着、片のとう、そ、組が賣るの異人も日本が

こまやとせでやりやアあめへと必ッて後述にて来た  
 ところが香港で志けとこッてえく遍及志てぬ  
 うち日本お湯が下ッこのんだらかりかゝる商討  
 困ッてわくはもうのどが彼奴等の目的をせむ  
 りるとあんざから指毛系知で賣ッて志あふる管  
 だうらと組へ附述して性一をねびりつけて買  
 込策があるヨを代り周旋が欲張だうら一ヨりの  
 分ちやア系知あめ人がそと組だかいらが

半はんののからから船ふねをを周まわ絶たささううちちややアアどどううだだくく十二じふに油あぶら  
 をを買かったたととココウウくく地ちをを入いてて出でをを附つききややアアおお入いせ  
 そそののままよりよりのの赤あか洞がほをを買かってて入いれれるるおお釜かまからら利り  
 賤せんがが降くだりりててきたたがが彼あれれのの異か人どがが買かっ  
 たたとといいふふららとと志しをを入いれれるる買かいい込こむむののだだぜ  
 おおいいららアア神かみ戸こへへにに入いりりてて入いれれるる買かいい込こむむののだ  
 けけししととココンンペペイイニニががささららとと立たっってて居いるるかかららどどんんなな利り  
 小せがが降くだりりてて沸わかかりりとともも煮ゆききややアアとと度ひらげげるるここととが

商賣の道ゆ

か  
代物と

ま  
秤の

目分量

青陽山人



見雲人  
作

といふ程へから勢愈々十三神戶の格別の大商法と  
 りよの志やアねへがらつとどかり目的があるのサ  
 佳くはげぶ一志やのあめぐはさだがやが換り志ぬ  
 一法りのサそまふ今年のは非上海の凡陸あつり  
 まで航海あつりつとつとつける法りのサ何ンでも  
 大商法の洋航志ねへ志やア大判がねへつら去年  
 あめりかのカンフランシスコの鴨覽舎へ行く法りの  
 だつけが吉原の立退へ引つかつと大敷賤を志

といふとんちんかんとありおけりサどうり二三年の  
 内は世界中の繁昌を港へかへつて大六や伊勢  
 勢あんどあもあつらねへ身まふあつて港の志ねへ  
 の上を載して一年中十方両づらひみか易を上納志を  
 一めんごころつらつてあるのびヨハテ人の大きかこつを  
 のごまね入けりやア園地の人物志やアねへヨ碑てやら  
 といふの志やアねへが是れであらうがえとご志法は  
 めもめそとあつてつらつてのねへのつとつら統市と行つ玉か

そがかりあざら一敷ウシとあんめりまやアる方や十万  
 の金か銀ぎんのたちちままええにに勝かたららアア子こコレレササ高たかきき湯ゆ  
 さんさん志しりりうう志し海かい入いヲヲヤヤココクク〜とと結むすむむととぐぐののららハハククア  
 果は報ほうのの毒どく〜中ちゆう法ぽうののりりノノヲヲイイ〜そそんんああ石いし筋しん強かう  
 志しややアアののううかか〜後ご入いヨヨああつつかかりり〜モモウウ一いっ振びんママ〜くくちちの  
 ぬぬくくおお合あいいダダ〜

○芝居者の身負

あつらひの芝居の辨地を意が〜と白濁の才文字ゆて深ぬれりとも  
 白字ゆ〜をわけたる上いふ下タ思ハ入〜志あるのほう

たつひたりせうらふつりある〜幕まきををせせ〜のの坐ざええとと地ぢ  
 春はるのの仕し初はつ小こ優う紙し状じやうとと一いっ幕まきををせせ〜のの坐ざええとと地ぢ  
 肉にくのの隙ひま通とほ〜作さく者しや河か井い新しん七しちガガ工く風ふう〜去きょ年ねんのの仕し初はつ小こ勸くわん  
 進しん帳じやうとといいせせ〜指さ〜とといいせせ〜中ちゆうままららひひののままららひひののままららひひ  
 ぐぐせせんんらら尚しやう村むら俳はい優うハハ今いま戸と河か系けい傍ぼう小こ隈かたりりゆゆにに  
 子こはは客きやく一いっ三さん條じやうひひのの糸いととと年ねんのの着ぎ〜小このの〜わわししちちややアア踏ふみ  
 希き七しち代だい目め市いち川かわ海かい老らう翁うゆうああんんどどよよりり又また一いっ段だんああらら〜るるかからら

かくまきこのんでせ入おはせと鹿角かかく没者ぼつしやの一文上り  
 でせ入やほから仕種ししゆがよくあつて人氣にきが糸いとツとく  
 りやア万事ばんじひおき目があつてきやほの子こそれ小こ私わたくし  
 の方ほうの太史たしえはんのめつちう方寸ほうすんが廣大くわいだいから顔  
 見世みよでも仕物しぶつでも他死し所ところありの一倍いちばいきを入いれきとく  
 様さまを植うえてもあまろくさきみ樹きの植え込こめ孫まご人ひとからみの  
 づら橋はし小こ光ひかりりが出いてサ系けいきまがよくある日ひけと  
 せ入せいやほあめはんのめつちう人ひと名なの孫まごがよくあつ

ちやア人ひとのつらさやせん去年こぞの植えせめやア三町  
 あづら飾かざりり物ものの孫まご人ひとあつて私わたくしの方ほうの太史たしえの思おも  
 ひつたで三好町さんこうちうの玄げん老らう先せん生せい小こ美み合あしと茶屋ちやのまん  
 へ芳ほう幾いく小こ似に顔かほを画かせと糸いとままととつちからて出いせ  
 年尾ねびの内うち小こ河か竹たけさん小こ御ご色いろせと一ひと幕まくらかせと  
 仕物しぶつ小こえせるあんどのひ紙し向むかひか新しん迦じさぬでもお  
 ぞんどあめ入いれナントまごの大將たいしやうちやアとせ入せいやせん  
 執しやくきやアとせ入せいやせん寡くわ小こ去きよ年ねんの忠ちゆう臣しん孫まご十二じふに町の

あめうらみんがア見物の後と名づりや〜の志やアご  
 せ入やせんうそも不没者が山姥やおも徳を  
 つる屋の老成で勉強ぞうひでごせ入やまからみ  
 る透きやアごせ入せん今戸の小林平八郎の弟  
 志〜とよ〜ごせ入や〜を湯茶のあらび  
 あつ物ッあつらとりやア強坊の名跡ダライ〜下女  
 さんあんずり研があつら〜後の中で羽目を敲い  
 て三介と悪口せ杯洗の池の湯の後の幸へのを

調合〜と水がぎまがかり〜をわらびりふり〜きな  
 ハテ水の安イ物本のき〜のあつら〜か〜あ  
 のアイ〜とよ〜ごせ入〜エモシ世船さつた尾  
 の丸とお出〜あ〜と入〜智〜て遠入込〜の  
 夜目遠目〜が物者あ〜か〜と〜〜子時  
 仲頼〜の層八小喜知亡中津治の二人サ子けん  
 のん〜モウ一足〜の〜で彼奴〜あ〜りゆか  
 ぐらう若ら〜ら〜松〜と〜ら〜牛店に連込



當場扮作

演戲道人



雷雅

丑生姿  
惡貌羨心  
相見知  
天地從來  
如雜劇  
世營一酌  
介無私



まろろふやアめつらやまのうろせつひ有明樓う方七  
ろ乃至利口とをせて親野附合らかして救方とて  
も河津を渡るかでいせ入やまのうろせつひ有明樓う方七  
つて一人若二分宛の散財サア危ふいと病けた  
のやふあめくはんと私とりやみ送給がむらみ紙で  
のびもがら移がこめづろとあつらふろく年若で肉會  
ちやぶくともまめやうと座敷一はをとったばかりの紙で  
ろろろのかつかにとまらりとあけくろ石養者えつけ

うごまやアがふと夢をかきこのとたまるとおつたら  
 梓屋の大宮ゆえ没サ子そのあとかく家おとりのと  
 されこの山谷堀と後若町の花藝妓がニ夕廻サ子  
 ねも平ツクリ志らからあめ入まんの熱とるるとそ  
 いと那強勢めんぎのびらうてあめびあくせせ花盛付  
 くらつてヨヤまんあぶらうどらうらうよく暮る異  
 きたぬとて一を寂しくあつてあつてあつてあつて  
 ったとりの波ゆくと三階君あつてあつてあつてあつて

日ん云ぐ大の夢の趣の幽の鳴こるあもるしイ物を  
 牽抱しとてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 浮世の夢理とあめ入まんのか熱だつてあつてあつて  
 りやせんがけ取のあつてあつてあつてあつてあつて  
 解かるとあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 アあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 知まるとあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 らんのあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

きつわがあつとらうあめんざぶびんやまエ十二私の登揚  
 せる妓家の附合ッくやるエそのつらあうが對面  
 する我ぬ郎のせうふあやアぬ人が花すちえたるを  
 のあやせハテめぐ〜バツタリやう〜あん  
 中う溜もく〜又探洗をひつらうけ〜ヲも〜秘入さん  
 や雜巾〜

○數醫生の不養生

▲九入る口とて門れ本道別科とりのあててま園の〜のまや  
 しく別れたの〜ゆせとらんせんせは〜の因〜

をあけつわんはあがりのデモもあや湯室倫の園字解は日ありあある野だ  
 りと九郎もあやハああやだ〜ら〜ういひぬせの和也と〜と〜と〜と〜と〜と  
 であくあつら〜あけ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 となあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 人もあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 なる〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 一人〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 する〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 といつ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 君老あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 から切抜やう〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

けまぶるはちとてありとらありともありと効考して終審  
してあるは親類昔から立合せるといふは洋家の教  
醫一医者めが歩けてうせおつたともその場とゆざつて  
進小後名もきめらるんから控合志とてとてつら  
彼奴あうくの切若とてつら若老あどが足えしあか  
付くことぞありつらりあがんあどあかしつて候  
考つては洋家のやうな医道は盛んおひらけつて一  
道の若老あどが医者のお似せとてあつたといふ

テあらうしあんが物あつたの若老あどが  
漢家の行をまゝつらつら葛根湯たつら大柴胡湯  
たつらあつたの薬名も大黃人參甘草陳皮つら  
いあつたつらあつたが漢医の古方後世とも廢止とて  
人の時世小及ごゆ名医業とて生活をとつたつら  
洋家の名目も口えだけいあつたあけもつたあつた  
薬らひそつら今から学ばせつたせが別小薬名を  
かり問小つらつらあつたつら病家には中絶して今日

のやうな西洋家と應接をせよ一版おあつくりと  
 蛇小會つた嘘どうやうではんごをかりからゆや  
 あらんそのたびくし半年ごも考余をちがめるの  
 だらうどうでも廢業して指前の野村間と店をば  
 あわそ方が上策だと思せんこの医者の対ごりのは  
 のりだが毒買めうりでおろしやうもあつりて金ば  
 させる病人もあるのだからひあれた引ださうと  
 ともころが愚者と活業師の如くおつて周施して是

性曉斎

じよりも

舌のきれたま

病もせぬ

人を

あつりつと

まじりふ

救医者

善悪坊



ろのが結句めりく千両廿七んおめんどうあことより  
 後輩の十二軒うあまのあまひ茶屋あつりの知己あ  
 る如く腰をわけく綱を強ッくあま入はるやア何如  
 かの出入場のみ子う乃至若く者あぞお出合のサ  
 ぞ知くイヤりい入らうぞらうらうぞらうぞらう  
 ららちやア後をよせる敷盛のねくらうらうらう先生  
 と遠へこんで来るのをこつて鉄面皮勿沸で一才  
 一振りうらうごストサ理うらうけうも割煮店らうき

こんで上戸でも中戸でもあうきらひあく口をわけく  
 やつた若妓と合保してまんぐあ志のつけを彼奴の懐  
 中をかきあがして西用ゆであづうらわらう仲から合  
 計とその日の立前を此方からあまうらうてあまうらう  
 蕨妓の尻尾を括とく捲金の小釣をとらうらうも  
 あまうらう人カ車の二挺仕まうらう吉原へても引強ッて知  
 己の茶屋へ送り込んで伴衆のあま踏足物とる金銀  
 の異人館一覽とる号して大奥行をさせり利徳ハ

茶屋とたつたけ 遊母あんの先生様サかろ  
 仁術を施につけくあるゆゑ一級三分やあんの  
 業れをあてふぢぢむい病人あぞを黄焼かへし  
 志てあらまんと廢業く志くするて業を廢したる  
 風邪業の小きひどりがでたぬとイヤくどりでも送  
 業小園係志てあつての舞嫁の媒妁地面家作の園  
 絶方の邪小あるから本居外科と割書の表れ  
 と取除く武作堀新庵とをかり書いてあろう。そこ

で坊主もくすでい 舊弊が一洗せぬやう志わからる  
 世橋小ざんぢりと鬘をかへるが名簿志やテイヤかれ  
 こまらあうらモウ七字志や飯の宅に食比く湯一  
 中の酒が二合コレく女中とのかん志やうのらく  
 ら志やく

○落語家の樂屋墮

とこのころ二十二三のころあぬ白く大いさ目朝の藝技あぞを強めてあ  
 つのりあも中入中入ニニまのあとあてわうさ入あがる志らうと志あ一のぬけ  
 ぬ志らものま年の志るあうりまをだんあかぶのひんらあといまもこのけ  
 があつ小ら志して志うの志る志は死志志志る大志志志る志あといそ  
 志わの





やして夜席の出がけあんどやア牛を招一あめ  
 うんまかけ持あぞとつとあつと多座でどんあめ  
 ちやぶりのらあまやせん。ハイアットととせ入やま  
 くそつたぐつけくらたぐくと夜席がつとまりや  
 せんあざんあらふつこぬらと一どんららのあやア客  
 のあつあつの減るまづけつらとせりやせんが初日から  
 之晩目でせ入まからなが要といふ知をげス。ハイ  
 座席の長をらつて夜入並座亭と一寸申入前と

つらめ申してはと小東橋亭の切をよほとそれら  
 青原の新席がとぬとせ入やまハイ有りかつら  
 マア出ひおきのからげとせ入あざん百六十足を  
 り系りやたらと並本も東橋もまが方又又三四百  
 いめへるゆうやありせうとどんとやま並本の四朝  
 の後と茶櫓が小さんむらくの後とのふのんごご  
 せ入やまから強勢骨が折色やまが蕨枝と新が  
 一トをん代り小申入前と切をつらめるのとせ入は

からせうの有がふいふと赤首で希づらアううやを  
 そよ不蒸枝が幽春のそよ物不自作や〜  
 花がらりの月影とゆふ物とそよ〜  
 が吉原新聞今様姿といふのを新作とや〜  
 ら今夜ツから日晩のつれ物とそよ〜  
 ら若さん一トせんか嘘小お出あはつてせせ入知しかう  
 せしちやア香といふやうでせせ入はが私とあふあら  
 縁人前有人の才子ぶんおありやして作のたふは

こ〜やう〜たうらやうありかうありやとゆう〜  
 せやまがとほし物うらま〜  
 ありやアそよを的ゆ〜とほしお実が入りゆまが  
 の前でたうらまおぼへらせよ〜  
 を回史野人があつた〜  
 モ〜ラット〜  
 ちやんと〜の飯をよめるとあやせうあや〜  
 せんう若だんあもあんやうあがら縁人方たうら

見電人物付志

懐中物用



込合リ席  
 多後、おん  
 菊程、おん

黒牡丹  
 一割金一朱

あつりの西利さいりのラットあぶねはんぞろろ鍋なべがとんがを  
 かへるとささげ〜ライ〜移うつさんやアノあな親おやか〜  
 そろい〜生なまのよま家上やまをまじまじ焼やたた糸いとははじじ〜田い人に中ちゆう〜  
 たた〜と〜せんせんのせうちたろうのライ〜そ〜  
 肉にくをたんたんとヨエコレ〜めんめんごうごうだらうが葱ねぎを小口こぐちか  
 らぎ〜〜小切せきツ〜熱あつ湯ゆをかけ〜持もッッてま〜らん  
 むエモシし〜まが異い人にんのコックこくといッたらら〜かろやを〜  
 かちやぶ〜やの速あひ傳でんで〜せんま〜せませ焼やを食たら

あとで葱わらびの湯ゆどろろをわがッくぐらうどろ極げん西洋  
 でせんすからサせんのらうちか中ちゆうのふモウ一杯いちぱい  
 わがッたろどろでげス子こ一いち量の系けい物ぶつが研けん壺ちゆう  
 のおとッろへ一寸いちゆんか破やぶ二に量りやうが楷かい口こうを頂ちゆう戴たい子こ  
 ア~~~~と~~~~やアとんと前ぜん産さんのの~~~~り~~~~サ子こ  
 りよ~~~~らどのおと~~~~ら~~~~ら~~~~

牛うし店や雑ざつ談たん 安愚樂鍋三編上



010190522836

五册巧解

卷四